

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程5年	齊藤 美野 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授/委員長	鳥飼 玖美子 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	森田思軒の翻訳観：文学翻訳にまつわる異質性に焦点を当てて		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程5年	齊藤 美野	
研究期間	2010	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、日本の明治時代の文学翻訳に関する研究であり、文学翻訳者・新聞記者である森田思軒(1861-1897)の翻訳観について考究したものである。思軒の翻訳観(翻訳に対する考え・態度)は、思軒の言説(エッセイ、講演録や翻訳書に付された序文、訳注など)と翻訳作品の分析から探った。思軒の言説、翻訳実践を社会的コンテクストと共に、Even-Zohar(1978/2004; 1990a; 1990b)が提唱した「多元システム理論(polysystem theory)」を用い考察し、翻訳観と当時の言語や文学の状況との関連などについて論じた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[文学翻訳] [森田思軒] [翻訳観]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度の研究によって、前年度以前から執筆を続けていた、博士学位申請論文を完成させることができた。ここに、本年度書き進めた箇所を中心に、博士学位申請論文「森田思軒の翻訳観：共存する二つの志向」の概要を研究成果として記す。本論を通して行ったことは、日本の明治期の文学翻訳者・新聞記者である森田思軒(1861-1897)の翻訳観(翻訳に対する考え・態度)を、思軒の残した言説(エッセイや講演録、書簡、さらに翻訳作品に付された序文や註など)と、思軒の訳した作品「探偵ユーベル」(原著ユゴー)を分析し探ることであった。その際に、翻訳観と明治20年代の社会的コンテクストとの相関を考察するために、「多元システム理論(polysystem theory)」(Even-Zohar, 1978/2004; 1990a; 1990b)を用いた。思軒の言説と翻訳実践、社会的コンテクストとの関連を描写し、思軒の翻訳観に見られる起点テキスト(翻訳の原文、原作)志向と目標テキスト(訳出されたテキスト、翻訳作品)志向について論じた。また、多元システム理論の観点から、明治20年代の文学的多元システムにおける翻訳文学システムの位置について、文学翻訳のもつ異質性についてとともに考察した。森田思軒は、明治文壇では「翻訳王」と呼ばれ、重要視された人物であったが、死後は注目されることが少なくなり、研究対象となることも少ない。だが、思軒は翻訳法について、また文章一般について多くの言説、及び翻訳作品を残しており、そこから翻訳観を探ることができる。本研究は、この森田思軒という人物に注目し、その翻訳観を確かめながら、当時の翻訳文学全体の様子についても探った。

今年度、主に執筆した箇所は、分析に用いた多元システム理論の背景にあるロシア・フォルマリズムの文学理論についてと、明治20年代の多元システムを理解するべく論じた当時の文学と言語の状況についてであり、以下にこの二点について記す。まず、多元システム理論について、理論の背景を中心に述べる。イーヴン＝ゾウハー(Itamar Even-Zohar)により提唱された本理論は、文学作品を複数の「文学システム(literary system)」の一部として捉え、そこに翻訳文学も一つのシステムとして加え、展開されたものである。よって、本理論は翻訳テキストを孤立させるのではなく、目標文化・システム(訳出先の文化・システム)の中で、複数の翻訳テキストがもつ役割の考察など、目標志向(target-oriented)の研究を可能にする。なお本論は、目標志向の研究でありながらも、森田思軒の翻訳活動において、起点側(原作を産出する側)となる英語使用国及び西欧列強と目標側である日本との関係性も考慮に入れるものである。

多元システム理論は、文芸学者であり、ロシア・フォルマリストであるトゥイニャーノフ(Jurij Tynjanov, 1927/1988)の「体系(system)」の概念に着想を得たものである。(なお、本論では基本的に、「多元システム理論」という訳語に合わせ、「体系」ではなく「システム」という訳語を用いた。)
「システム(体系)」とは、複数の要素・機能をもつものとして文学作品あるいは、文学ジャンル、文学全体を捉える際の用語である。一つのシステムである文学作品、また文学は、固定的なものではなく、流動的であり可変的であり、このことは文学の進化を可能にする。文学の進化はシステムの交替であるとされ、文学のある要素が使い古されたものになったとき、別の要素が重要性をもつというように、進化による交替が起こる。このような、文学作品・文学はシステムであり、諸要素との関わりによって、変化していくというトゥイニャーノフの概念をもとに、多元システム理論は展開された。イーヴン＝ゾウハーは、文学的多元システムは、主要なシステムと二次的な複数のシステムが合わさったものであり、システム間には階層性があるとする。この階層におけるシステム間の関係は、流動している。そして、翻訳文学も文学的多元システムに含まれる一つのシステムであると捉えられるため、翻訳文学を一つのシステムとして、ほかのシステム、例えば創作文学との関係性について考察することが可能となる。

イーヴン＝ゾウハーが使用したシステム概念は上述の通り、ロシア・フォルマリストであったトゥイニャーノフによるものであった。ロシア・フォルマリストは、文学の考察の際に、文学作品をコンテクストから切り離し、静態的に捉える方法をとっていたが、トゥイニャーノフは、文学作品とシステムとの相関性の考察を必要と考え、文学作品の変化や発展について研究していた。1920年代後半には、ほかのフォルマリストの間でも、文学作品の作者や社会への関心が出てきたが、その後の文学研究におけるコンテクストの重要視と比べ、総合してフォルマリストの態度は、文学作品自体の中に全ての文学的要素を見出そうとするものであった。フォルマリストの研究成果はその後、1930～40年代には、プラハ言語学サークル(プラハ構造主義)へと引き継がれた。ここでは、チェコの美学者・文芸理論家であるムカジョフスキイ(Jan Mukařovský)らによって、社会的コンテクストの中で文学が考察された。おそらくこのような流れを踏まえて、イーヴン＝ゾウハーは、文学以外のシステムも考察に含めることとしている。翻訳について、テキストそのものだけではなく、そのテキストが存在するコンテクストと共に考察し、また、翻訳文学システムを、複数の(多元)システムの中のシステムだと捉え、その中でほかのシステムとの関わりをも考慮するのが多元システム理論なのである。イーヴン＝ゾウハーが上述のように論じ、Gentzler(2001)も(イーヴン＝ゾウハー自身は、あまりその点を含めなかったと指摘しつつ)述べるように、多元システム概念は、社会・経済状況などの文学外の

研究成果の概要 つづき

要素も含めて考察することを可能にするものである。本論は後述の通り、翻訳文学システムを文学外の要素、主に明治期の日本語の状況や、西欧や中国など他国との関係と関連づけながら考察し、多元システム理論が、文学翻訳を孤立させない考察を許すことを示した。

本年度加筆した箇所之二点目である明治 20 年代の言語と文学の状況を中心とする社会的コンテクストの論述は、主に、近代化に伴う「国語」の創出についてであった。文学翻訳について研究する上で、森田思軒ら当時の翻訳者、翻訳作品の読者にとっての「日本語」とは、どのようなものであったのか把握することは重要であり、そこから、思軒の翻訳観に見られる、日本文章の変革を求める考えなどについても理解が可能となる。本博士論文の第 3 章にて論じたのは、例えば、上田万年による「国語」の必要性を訴える講演や、漢字や漢語が否定され言文一致化が目指されたことであり、そのような事柄から、当時の日本が、近代国家として新しい文学や文体（文字）を必要としていたことについて論及した。また、言文一致体と速記術が相互の発展に寄与していたことや、「青年」と括られる書生らが用いた文体は自己探求を行うものであり、「青年」は形式化した文章（漢文体、漢文訓読体）ではなく、日常的な文章（言文一致体）を著したことなども論じた。以上のような、言語、文学における変化は、多元システム理論の観点から見ると、日本の文学的多元システムが大きな転換期にあったことを示すものだと考えられる。イーヴン＝ゾウハーは、転換期は、翻訳文学システムが多元システムにおいて主要な位置を占める可能性がある一つのケースだとする。このような社会的コンテクストが思軒の翻訳観の背景にあったことを把握することは、当時の翻訳文学の地位について考える上で重要であった。

上述した二点の加筆箇所と、思軒の言説及び翻訳作品（「探偵ユーベル」）の繋がりを、本博士論文の第 8 章において述べ、その関連を描く中で、a) 思軒の翻訳観に見られた二つの志向（加えて翻訳文学システム内の両志向）の共存、b) 異質性という文学翻訳の性質、c) 明治 20 年代の文学的多元システムにおける翻訳文学の位置、以上三つの項目について考察した。文学翻訳、翻訳者は孤立したのではなく、当時の言語状況と関わりをもつのである。思軒の言説と実践は、当時の国家主義的、近代言語改良主義的イデオロギーをもつ人々の「日本語」を創出しよう、また発展させようという動きと繋がるものであった。この時代に生きた一人の翻訳者・記者である思軒の翻訳観や周密体と呼ばれる訳文体も、明治初期のコンテクストの所産であった。思軒は、洋学（英語）を学び、また洋行の経験から、西洋の思想に触れ、受容していたことは明白であろう。思軒をはじめとするこの特定の時代に生きた翻訳者も、西洋の文物に接触し、近代化を押し進めるエリートとして、「青年」らと時代のイデオロギーを共有していたのである。

思軒の翻訳観には、起点テキスト志向とともに目標テキスト志向が表れていた。言説や翻訳テキストの分析から、この二つの志向は、対立し、また融合しながら共存していたことが示された。同時期に活躍していたほかの 8 名の翻訳者の論によって、思軒の翻訳観に見られた両志向は、思軒以外の人物の翻訳観にもあったことが示された。このことは、両志向が、明治期の翻訳文学システム内に共存していたこと示唆する。本論の結論として記したことは、翻訳文学システムが社会的コンテクストと常に相関していた点がある。国家の言語としての「日本語」の創出や、それに関わって言文一致体の登場、また近代「文学」の発生があった。このような事象の背景にあった言語・文章に関する思想は、思軒の翻訳に対する意見と重なる部分が多い。日本の言語を、古い伝統から解き放ち、新しい時代に合わせて進化させようという考えが、両者に通じているのである。そして、文学的多元システムにおいて、翻訳文学システムがどのような位置にあるかは、翻訳実践にも影響を及ぼすとされる (Even-Zohar, 1978/2004)。翻訳文学システムが優位を占める場合の翻訳実践への影響の一つには、訳出法として、目標文化・言語の既存のモデルを用いるのではなく、慣例に反するような方法を用いることがある。思軒の翻訳観に起点テキスト志向が強くあったこと、即ち、思軒が目標言語・文化の慣例に反する訳出法を推奨し、異質性を移入する訳出法をとることができたことは、当時の翻訳文学システムが多元システムにおいて優位を占めていた可能性を示した。日本の発展のため西洋の作品から学ぼうという、翻訳者を含む近代主義の思想を身につけた人々が増え、西洋の文学作品の翻訳が多数行われるようになった明治期において、思軒もまた、日本社会の発展のため異質性を重視する考えをもち得たのであった。本論の考察を通して、文学翻訳と時代が、大いに関わりをもつことが明確となった。明治 20 年代について言えば、近代化に際し、文学翻訳（及びその他の翻訳作品）が重要な役割をもったということだけでなく、その時代の中で翻訳が行われていたということが大切な点である。翻訳行為には、起点・目標テキストだけではなく、翻訳者、その翻訳者の翻訳観が構成される社会的コンテクストに代表される様々な事象が関わっているのである。

※ この（様式 2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1.
齊藤美野、「明治初期・中期における文学翻訳の役割」、『異文化コミュニケーション論集』第9号、2011年、印刷中

2.
齊藤美野、法政大学出版局、「解題5 森田思軒「翻譯の心得」」、柳父章・水野的・長沼美香子(編)『日本の翻訳論：アンソロジーと解題』収録、2010年、pp. 83-87(5ページ)

齊藤美野、法政大学出版局、「解題6 森田思軒『夜と朝』叙」、柳父章・水野的・長沼美香子(編)『日本の翻訳論：アンソロジーと解題』収録、2010年、pp. 89-90(2ページ)